HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	中国語教育の実践における漢字の構造と思考様式との関係についての一考察
著者	蘇，林
引用	北海商科大学論集，11(1)：10-27
発行日	2022-02-20

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

受理日:2022/02/20

中国語教育の実践における漢字の構造と思考様式との関係についての一考察
A Study on the Relationship between Chinese Character Structure and Thinking Style in Teaching Practice of Chinese Language

蘇　林　Su Lin

要旨

文字は文化と文明を伝承する最も重要な担い手である。特に中国の漢字は、数千年の長い歳月を経て、民族や地域にわたって、中国の歴史や伝統文化を記録し、媒体として伝承されてきた。漢字のその永続性と表意機能については、今まで多くの研究が行われてきたが、本稿では主として中国語教育の実践における漢字の構造と思考様式との関係に焦点を当て、漢字を構成する造字法の思考様式と易経の「変化」、「交替」、「統合」といった思考様式との連動性を考察し、漢字の形成の基本には、造字法の「発想–漢字–連想」といった交互に影響する関係があることを明らかにした。

キーワード：漢字　漢字造字法　漢文化　思考様式　易経

Abstract:

Characters are the most important bearers of the transmission of culture and civilization. Chinese characters, in particular, have been handed down over thousands of years as a medium for recording Chinese history and traditional culture across ethnic groups and regions. Although much research focuses on the persistence and ideographic functions of Chinese characters, this paper mainly studies the relationship between the Chinese characters structure and thinking style in Chinese education practice. It examines the linkage between the thinking style of the Chinese character formation and "change", "alternation" and "integration" in I Ching. It found that the basic formation of Chinese characters based on the alternating influence of the "idea-Chinese character-association" of the method of making Chinese characters.

Key Words: Chinese Characters　Chinese Character Creation Method
Han Culture　Thinking Style　I Ching

 受理日:2022/02/20

１．はじめに

文字は文化と文明を伝承する最も重要な担い手である。特に中国の漢字は、数千年の長い歳月を経て、民族や地域にわたって、中国の歴史や伝統文化を記録し、媒体として伝承されてきた。世界四大文明の古代文字のなか、現在も使用されているのは、漢字が唯一である。しかも、漢字の書体も様々に変化してきたものの、その表意的な機能が失われず、現在までその役割を果たしている。漢字に関する研究は、中国のみならず、日本をはじめ、多くの地域において研究されている。そのなかでも日本の漢学者白川静は、突出した研究成果をあげた代表者の一人で、漢字の文化的原点として「漢字の起源」[1]から着手し、末端の仔細な「漢字の諸問題」[2]までを論じ、日本における漢字研究を網羅した研究者といっても過言ではない。また、冨谷至により編集された『漢字の中国文化』は、一連の漢字と文化を中心に展開した研究成果として漢字と文化を理解する上で不可欠なものであり、第一部の「漢字—その成立と展開」[3]や第二部「金石竹木が語る漢字社会」[4]など、日本の学者による漢字と中国文化との関係について、あるいは漢字の永続性と表意機能について、実に示唆的な研究を含んでいる。本稿においては、それらを踏まえて、漢字の構成の仕方とその思考様式との関係、いわゆる造字法（漢字の組み立ての仕方）の「発想—漢字—連想（発想の変化）」といった交互に影響する関係について探求する。筆者は、中国語教育を実践する視点から漢字を構成する造字法とその思考様式との関係を検討し、改めて漢字の造字法を通して、漢字を認知するプロセスにおいて漢字の習得者や使用者の思考様式との関係性を検討してみたい。

方法としては、まず漢字の構成する造字法を解説した最古の字書である『説文解字』と漢字の起源を表わしている原始的な刻符を考察したうえ、漢字の構成する造字法における思考様式について検討をする。次いで、漢字の構成と漢字の習得者や使用者の思考様式との関係についての考察として、主に造字法による分類された「六書」[5]の漢字の構成の仕方がいかに造字者の思考様式と関係しているかについて焦点を絞り、易学の「変化」、「交替」、「統合」といった思考様式との絡み合いを考察する。それらから、造字法の「発想—漢字—連想」といった交互に影響や協働する関係をなしていることを解明したい。そうした漢字の認知過程を通して、漢字の形、音、義を統合するという機能がいかに漢字の習得者や使用者の思考様式と関係しているかを究明したい。

２．漢字の成り立ち

『説文解字』は漢字の研究者にとって、とりわけ教育者にとって欠かすことのできない必須な基盤研究資料である。そこでは、漢字の起源は「蒼頡之初作書、盖依類象形、故謂之文、其後形聲相益、即謂之字」[6]と解釈されている。いわば、その時代においては、書は文字に該当するものである。つまり、「文字はまず蒼頡が象形の法によって文を作り、のちそれに聲を加えて字を生じたという」[7]。また、「字者言孳乳爾浸多也著于竹帛謂之書」[8]と説いてい

る。いわゆる、文字というものは、言語により孳乳（派生）し、徐々に増えてきたものを竹や帛に記して書と称したということである。なお、これまで、殷墟から発掘された甲骨文字が最古の漢字だといわれてきたが、1987 年に中国の黄河の南にある河南省舞陽の「賈湖遺址」から発掘された甲羅に刻まれている「賈湖刻符」は、約「8000 年前の賈湖の人が創造した契刻符号は、原始文字の性質を有し、商の甲骨文字とは関連があるかもしれない」[9]と指摘されている。また、図 3 示された半坡遺跡出土の陶片に刻まれた符号もまた、「文字性質的な符号であり、中国科学院考古研究所の測定によると、すでに 5、6000 年の歴史を持っている」[10]という。図 1、2、3 のような刻符は、いずれも、「盖依類象形」の証拠になる字符であり、物事の形体を図形に描いて意味を表していると思われる。

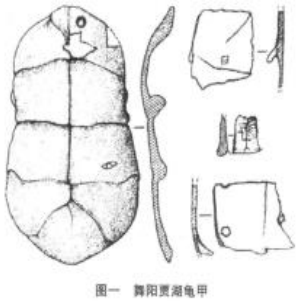

図 1 河南省舞陽賈湖亀甲

図 2 舞陽賈湖刻符

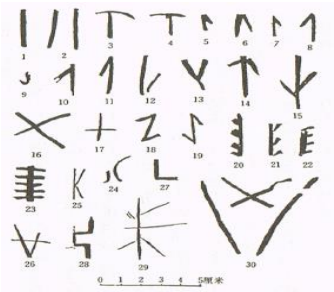

図 3 半坡遺跡陶片符号

出典：図 1 馮凭　吴長旗「舞阳龟甲刻符初探」p.51　『中原文物』2009 年第 3 期
図 2 劉志一「贾湖龟甲刻符考释及其他」p.11 より作成　『中原文物』2003 年第 2 期
図 3 阿辻哲次『漢字の文化史』p.12　日本放送出版社　1994 年

漢字の始まりは、象形の絵文字より始まったとされるが、「象形文字の理論からすれば、漢字ほどことばを具体的に、全的に表現しているものはない」[11]。馮凭、吴長旗の研究によれば、図 2 で示された賈湖遺跡契刻符号の（3）、（1）、（8）の三つの刻符は、それぞれ太陽、目、両手を挙げている人の様子を表している[12]という。

また、図 4 で示されている殷墟から発掘された獣骨刻辞は、すでに抽象的概念を表している文字と考えられる。古代漢字については、白川静が「古代文字としての漢字は、もとより象形の方法から出発している。しかし、その方法は、絵画的、描写的であるよりも抽象による線構成を志向し」[13]ており、「漢字ほど、「人間的表徴」としても、その自己表現を求めつづけてきた文字体系は、他にその例は見ない。そこには、神聖文字の伝統があった」[14]と評価している。

図 4 獣骨刻辞

図 5 甲骨文字

図 6　字体変遷

出典：図 4　http://www.360doc.com/content/20/0915/15/9305059_935767206.shtml__
（2021 年 11 月 27 日閲覧）
図 5　阿辻哲次『文字の文化』扉絵　NHK ブックス[721]　1994 年
図 6　加藤道理『字源物語漢字が語る人間の文化』p.8　明治書院　2000 年

こうした現代において発掘された古代文字は、許愼の『説文解字』に基づいて理解できることは少なくない。『説文解字』について、白川静は「はじめてその体系が與えられた」、「文字学の前史というべき内容を持つものである」[15]と解説している。『説文解字』の「許叙」によると、当時の漢字の学習と教育も『説文解字』から始まっており、「周禮八歳入小學保氏教國子先以六書。一曰指事。指事者視而可識察而可見。上下是也。二曰象形、象形者畫成其物隨體詰詘。日月是也。三曰形聲。形聲者以事為名取譬相成。江河是也。四曰會意。會意者比類合誼以見指撝。武信是也。五曰轉注。轉注者建類一首同意相受。考老是也。六曰假借。假借者本無其字依聲託事。令長是也。」[16]と記している。つまり、「周の礼に、八歳にして小学に入る。保氏國子（諸侯の子弟）に教うるに先づ六書を以てす。一に曰く指事、指事なる者は、視て識る可く、察して意を見る、上、下是れなり、二に曰く象形、象形なる者は、画きて其の物を成し、体に隨って詰詘す、日、月是れなり、三に曰く形聲、形聲なる者は、事を以って名と爲し、譬を取って相い成る、江、河是れなり、四に曰く会意、会意なる者は、類を比して誼を合はせ、以って指撝を見わす、武、信是れなり、五に曰く転注。転注なる者は、類一首を建て、同意相い受く、考、老是れなり、六に曰く仮借、仮借なる者は，本其の字無く、声に依りて事を託す、令、長是れなり」[17]と、八歳の小学生には、まず保氏により漢字の造字法による分類された「六書」を教えていたという。この「指事」、「象形」、「形聲」、「會意」、「轉注」、「假借」と説いた「六書」造字法は、表形、表義、表音に機能を持たせ、「表意性が漢字の命脈」[18]であることを示しており、おそらく保氏は、器物の形から文字、文字がその意味を表すという教育的な意味を説明しているのではないかと想定される。例えば、昼夜と交替している「日」と「月」二つの象形文字を左右に組み合わせば、「明」となり、上下に組み合わせば「易」（日月為易，象陰陽也）[19]と変化の意を表し、さらに「日」や「木」を上下左右に三文字で組み合わせば、それぞれ「晶」、「森」と

いう意味を表す会意文字となる。また、抽象的な概念を表わすために、漢字の創造者・構成者は、それぞれの発想で表現しようとする意思を「暗示的、記号的に示す方法で、点や線を用いて、その概念を表現」[20]したり、「既存の象形文字が、本来の物の象形としてではなく、物の意味を表す符号として」[21]の義符（形旁）や声を表わす声符を創ったりして、形、音、義を交互に変化して組み立てて抽象的な意味を表そうとしていた。しかし、一字一音の原則は変わらず（不変）、既存の漢字の二、三文字をもって合成して形声字を創り、形、音、義の機能を統合して、「形声字」を以って、その抽象的な概念を表現することができたのであろう。漢字の「信」や「武」はその一例であり、材、銅、梅、花、芳、梨、削、病、問、聞などのような例は多くあげられる。このように「変化」をさせるものと変化させない（不変）ものをもって漢字の構成と組み合わせ方は、漢字の造字者の思考様式が形成され、以って「六書」法によって固定化されてきたと考えられるが、おそらくその漢字の体形を構成する過程で、漢字の形、音、意を一体化にされた造字法も形成されたと考えられる。このことからこの「六書の法によって、すべてのことばを文字として表記することに成功した」[22]と言える。

３．造字法の思考様式

漢字の起源について、多くの研究者が多岐に亘って研究してきた。ここで差し当り、『易経』を根拠に見ていく。『易経』の「繫辭下」では、「上古結縄而治、後世、聖人、易之以書契、百官以治、萬民以察。蓋取諸夬」。すなわち「上古の、まだ文字がなかった時代には、縄に結び目を作って、それを情報を伝える手段として用い、それで世の中はうまく治まっていた。後世の聖人はそのような不確かな方法をあらためて、文字を作り、それを木に刻み込むことにして、事情の伝達を確実なものにした。そうすることによって官吏たちの職務はみごとに治まり、民衆はそれによってものごとがうまく治まっていることを了解したのである。思うにこのことは易の夬䷪の卦象の意義」[23]という。また、漢字は誰によって作られたかというと、古代の伝説よれば、黄帝の史官に仕える蒼頡が漢字を発明したとされているが、中国の思想家・現代文学家の魯迅は、「社会には、蒼頡も一人だけではなかった。ある者は刀の柄に図を刻み、ある者はドアに絵を描き、互いの意思が通い合い、口づてに伝達しあって、文字が次第にふえ、歴史家（原文：史官）がこれの文字を集めると、間に合わせに記録できたのである。中国の文字の由来も、恐らく、この例からもれないであろう」[24]と、聖人ではなく、民間大衆によって作られたものだという。いずれも推測の域を出ないが、説得力のある言及だと考えられよう。

筆者は初心者に中国語を教える場合は、まずは学習者に漢字の特徴から教え、漢字は、ひとつの漢字に形、音、義という三つの要素が揃い、ひとつの漢字には音節が一つしかない一字一音という「完全な文字」[25]だという原理を教える。つまり漢字は子音母音の音素を融合して発声する単音節である象形、表意文字である。白川の言葉を借りれば、「文字言語とし

て文字を媒介とするものとなり、そこに知的、文化的活動の場が与えられるとすれば、文字言語として形、音、義をそなえる漢字は、最も条件を備えた文化的な文字というべきである」[26]ということになる。ここでなぜ形、音、義を一体化にしている漢字は、「完全な文字」、「文化的な文字」となり、その機能を果たしているのか、次に漢字を構成する造字法の特徴を検討してみよう。

特徴１：一つの漢字に形、音、義を揃え、自由無碍に文字を結合する機能

中国の最も古い記録の賈湖刻符や甲骨文字をみてみると、その刻符や甲骨文字は、「近くは諸を身に取り、遠きは諸を物に取る」[27]方法で創られた文字の模様が見て取れる。つまり、人の目を描けば「目」という意味を表し、一個一個の形で「物事の絵象を読み取った意味で造形」[28]していることがわかる。「 」[29]は太陽で、「 」[30]は月であるが、もしこの二つの単独文字を左右に組み合わせれば、「明 míng」、「明るい」という意味を表す。つまり、一個一個の目に映されている物事の様子や形で点や線により文字を形成し、かつ四角い文字で構成され、単音節で象形表意して、一字一音の「完全な文字」になる。また、漢字の「旦」も同じ、朝日が地面か水面から昇るという理解によって字の形が創られ、一目瞭然な「完全な文字」である。つまり、造字者は、このような点や線による物事を表わす既存の文字を用い、それぞれの意味に基づき、左右、または上下と結合させて、その抽象的な意味を表現するように創られている。この造字法は、単体、単音節で意味を持つように創られているので、造語しやすくなり、最新物事にも簡易に対応できるような機能を持っている。例えば、現在よく使われているパソコンのことを電気の「电(電)」と記憶や思考などの機能を果たしている「脑(脳)」と結び付けて「电脑」と表現し、この二つの文字を見るだけで、脳のような機能を持つ電気類の物だと連想し、その意味合いで判断して分かることができる。同様テレビのことも「电视(視)」、ロケットのこと「火箭」と表記し、いずれも既存文字を用い、それぞれの意味に基づき、社会の発達に伴い、様々な新しい物事を表すように造語し、説明しなくても組み合わせた漢字によって、その意味をある程度想像することができる。さらに自分の教育現場での例を挙げると、オープンキャンパスで来る中国語の未経験者に、漢字のクイズを出して意味を当ててみてもらうと、発音ができなくても、すぐその意味がわかる人が少なくない。例えば、家電製品の「电冰(氷)箱」、「微波炉」やスポーツ関係の「棒球」、「冰球」、「篮(籃)球」などなど枚挙にいとまがない。多くの言葉は既存の漢字を用いて新しい意味に応答するように結合させ、必要な語彙が創られている。これは、いわゆる漢字の造字法に単体、単音で意味を持つような形、音、義をともに揃えている「完全な文字」の特徴がるので、自由無碍で文字を結合する機能が自ら備えているということであろう。

特徴２：単音節により簡潔明瞭であること

日本では、漢字は中国から伝来してから、継続的に使われてきた。しかも和製漢字も多く作られ、中国に逆輸出され、実際、現在中国において数多くの和製漢

字が使われている。しかし、中国に入った和製漢字は、日本の音読みや訓読みという多音節を取らずに漢字の単音節が維持され、仔細に調べないと、どれが元来の漢字か、どれが和製語か、区別しにくい。また、表意文字の Coca-Cora も同じ、中国に輸入されてからは、その商品を「可口可楽」（kě kǒu kě lè）と漢字の表義と単音節の特徴に従って表現されている。すなわち、いかなる時代においても、上古時代に形成された一字一音の単音節で漢字を創る規則は数千年に亘っても変化せず、漢字の単音節の作り方を維持してきた。例えば、「赢 yíng」という文字は、上下左右で五つの既存漢字で組み立てられているが、一字一音の単音節の規則を守って創られた。つまり、「単音節音素は、今までずっと漢語音素の基本形式である。音素の単音節化は、印欧言語と区別をつける中国語の基本特徴である」[31]というように、漢字は如何に繁雑に組み立てられたとしても、元の漢字の声を組み合わせず新たに単音節を創り出していることがわかる。例えば「木 mù」という漢字を左右に組み合わせると「林 lín」であり、それを三つに合わせると「森 sēn」と発音し、単音節の基本特徴を維持している。つまり、子・母音の音素を一体化に融合して一音になって発音している。これは、新しい用語を創る上で便利である。例えば「森」と「林」を結合させて「森林 sēn　lín」と発音し、元の漢字の発音も変わる必要がなく、簡潔かつ明瞭である。また、一字一音の表義文字なので、関連のある漢字と漢字とを簡易に組み合わせて造語する連想の機能も働ける。例えば、「森」と「林」、「元」と「旦」、「山」と「林」、「新」と「月」を組み合わせると、それぞれ「森林」、「元旦」、「山林」、「新月」という意味を表し、漢字の結合により新しい意味が派生され、漢字の表現が豊かになり、いわゆる簡潔で明瞭な「完全な漢字」となるのである。龚嘉鎮の研究においては、「悠久な歴史と国土の広さによりもたらされた多岐の方言は、声に基づいて文字を創ることが不可能だと決められ、単音節で文字を構成して、意味に基づいて字形を創る方法を選ぶのが当然なことになっている」[32]と分析されているが、たしかに漢字の造字法が「近くは諸を身に取り」、「象形」の四角い形を取って、一枚一枚の図画で表意と単音節で簡潔明瞭で物事を記録されているので、表音文字とは異なり、異民族の言葉に簡単に取って変えられることはない。例えば、犬が吠えると「吠」で、鳥が鳴くと「鳴」と記し、それぞれ「fèi」、「míng」と発音されているが、「最初で人間の言語音声は、有限個の音素（子音と母音）を組みあわせて音節を作り、その音節を繋げることによって数百語、あるいは数千語、言語によって数万語の単語を保有することを可能にする」[33]のは納得できる。特に「形声」や「仮借」造字法の発明は、象形、会意といった造字法の限界性を補い、鄭也夫の研究によれば、「一个声借字，转化为多个形声字，令其距离字母已经相当遥远了」（一字の声を借りて複数の形声字に変身できたことは、字母（アルファベット）とは遠く離させられた」[34]ことになった。その例として、鄭也夫が「同(tóng)」の字例を挙げ、「同」字の声を借りれば、銅、筒、桐、恫、酮など 22 の形声字が羅列している。この例からも分かるように、この造字法は、漢字の単

音節で、簡潔明瞭な特徴を持続でき、さらに形、音、義を揃える漢字の自由無碍で文字を結合する機能が働き、それが「完全な漢字」を成って進展してきたと考えられる。

特徴３：書画、書法など多彩なスタイルに展開できる芸術的な鑑賞価値がある

「馬」や「魚」の甲骨文字をみると、その筆画を表わす点や線が、「線は立体と運動を含むデッサンである。その長短あるいは強弱の線の交錯が律動を可能にする。…漢字がまた書の芸術でもありうる」[35]と捉えられる。自由無碍で文字を結合する機能が、さらに「合文以造新字，合意而生新義」[36]、いわゆる日の「 」と月の「 」の文を合わせて新字を創り、その意味を合わせて、新義を生まれるという造字法を助長し、漢字は、社会活動や人間生活の変化に伴い、必要な漢字が増え続け、新しい意味が表現できる一方、書写の仕方も多様多彩になってきた。点画、横画、縦画などの筆画から構成される四角い漢字からは、「書の芸術」的に表現する書法が生まれた。文化の進展に伴い、漢字の書体も甲骨文字から、だんだん金文、小篆、隷書、楷書、行書と、多彩なスタイルを通して、漢字の芸術的な鑑賞価値を有する「最も条件を備えた文化的な文字」となってきた。漢字の愛好者は、様々な書法を学習しながら、ますます美的表現手法を研鑽し、絵画の上に書法として志を表現する詩歌や情感を詠え、人間性や品格を修練して心や情感を豊かに表現することができた。点画、横画、縦画などの筆画から構成される四角い漢字の造字法は、様々な物象のイメージによる独自の書道までに発展することが可能になった。例えば、書聖と言われた王羲之や顔真卿などのような書法大家が多く生まれ、その書法は詩と書画とを一体化にさせ、形、音、意、美を兼ね備えて表現する佳作が多く残され、特に書法作品は代々と伝えられ、現在においても文化財として大事に保存され、後世代学習者の見本となっている。漢字は、最初の亀甲や獣骨、竹簡、木簡、青銅器などに漢字を刻んで伝承し、中国の歴史時代が如何に変化してきても、字体が如何に改革されても、今までその「表意性は古今変わることがなく」[37]、漢字文化と漢文化を継承し続けている。白川静が指摘した通り、「この民族の歴史と文化に断絶がなく、かれらがかつて文化的敗北を受けたことがなかった」[38]。すなわち、その「文化的な文字」は、上述した特徴を持っているからこそ、「この民族の歴史と文化に断絶が」なく、使用し続けてきたのではないか、また、漢字のそうした諸特徴が交互に支えあい、その支え合う関係によって形成されてきたとも言えるのではないかと筆者は考えている。

以上の考察を通じて、①一つの文字に単体で形、音、義を揃える漢字の自由無碍で文字を結合する機能を有する特徴、②一字一音の単音節による簡潔明瞭な特徴、③書画、書道など多彩なスタイルに展開できる芸術的な鑑賞価値を有する特徴を持ち、「完全的」、「文化的な文字」が形成されてきたことをみてきた。実際、漢字の学習者、使用者の多くの知識人は書画の愛好者、書道家になることが少なくない。彼らは、書道や書画などを通して、それぞれの志や個性、情感を豊かに表現し、「方言の多岐になること」を乗り越え、書体が煩雑な画数を書きやすいように変化させ、漢字の書写文化を絶えずに発展させてきたのである。

４．漢字の構成と漢字の習得者や使用者の思考様式との関係についての考察

漢字はアルファベット文字とは異なり、ひとつの四角い図形文字である。その図形文字の「漢字の歴史は、この民族の持つ精神史の支柱をなしている」[39]。したがって、単音節でありながら意味を持つという漢字については、漢字使用者の精神を如何に支えてきたのかを考えるべきであろう。龚嘉鎮が「漢文化が漢字に対する影響は、主に完全な文化伝統、国の長期にわたる統一及び民族の思考様式といった三つの面に体現されている」[40]と論評している。「漢文化」や「民族の思考様式」が、どのように漢字と関係して影響を与えてきたのかを考える場合には、「口語は心の声であり、文字は心を描く符号である」[41]と語られた以上、「漢文化」や「民族の思考様式」漢字に対して影響を与える一方、その漢字の構成法という仕組みも漢字の習得者や使用者の「思考様式」に関係して影響をあたえているのではないかと、筆者は考える。龚嘉鎮の研究においては、「われわれの民族は昔からイメージ思考、直感的な思考を推奨してきた。義に基づいて形を創る象形、指事、会意の方法及び形声、仮借文字（声の仮借を以って他の物事の義に専用[42]）に形符を付けて新字を創ることは、まさにイメージを形にして意味を表し、一目で見れば道筋が分かるという思考様式の習慣を具現している。われわれの民族は、昔から弁証的思惟、総体的（体系的）思惟を重んずることで、対立物の調和的統一することを強調し、このような思考様式は文字の単音節を守り続けることに影響を及ぼしている」[43]と指摘している。要するに、「意義が関連のある文字或いは機能の補う符号を弁証的に一つの四角いに統合した総体を、人々に会得させる」[44]ことで、「総体的」に見渡して「直感的」な思考様式が「六書」造字に働きかけている。また、鄭志朗の実験結果は、①四角い文字、則ちこの言語を使っている人は、小さい時から、各漢字の外形構成と空間関係に注意することを学び、②中国語読者の視覚記憶が比較的よい。③英文読者は右の視区の反応が早いので、脳の左半球で処理しているが、漢字は図形をとして認知するので、総体的、図形、空間などを分析して右脳で処理している」[45]という。彼の研究においては、「〈符号—思想〉は、我々の認知行為に交互に影響を与え」、さらに「人類文明の異なることは、それぞれ使用している文字の違いによって影響されたのではないか」[46]と疑問が示されている。この実験研究からは、漢字の脳の処理区域がアルファベットとは異なり、右脳で「総体的」、「空間的」に処理しており、各漢字の形と空間関係に注意していることが明らかであろう。もし認識行為がそうであるとすれば、漢字の造字者は、如何なる「弁証的、総体的」思考様式を以って造字法を考え、常に変化している社会に応答し、そこで新しい事物を表そうと漢字を作ってきたかを考えるべきであろう。そこで造字者の「発想—漢字」という構造がいかに漢字の学習者の「漢字—連想」に働き、またいかに「漢文化」、「民族の思考様式」において交互に影響しあう関係にあったのかを検討すべきことである。筆者は漢字の成り立ちにおいて、人は「文字を作り、それを木に刻み込む」と記している中国の伝統の起源とされる『易経』から「文字を作る」発想、そしてその発想で創られた漢字の習得者や使用者の思考様式との関係について考察しようと思う。

4-1.『易経』による思考様式

漢字を構成する造字法は、「六書」のように分類されているが、造字者はどのような発想で「心を描く符号」として創り出してきたのか、『易経』は「中国思想の性格を考えるにも、またその歴史を語るにも、…まことに重要な書物である」[47]という。そこで漢字を構成する仕方において、『易経』の発想とその「思考様式」は互いに連動して影響しあっているのではないかと筆者は考える。というのも、『易経』において、「上古の伏羲（伏犠、包犠、庖犠、宓戯）に擬し、伏羲が仰観俯察して八卦を画したと説く（下繫第二）」[48]とされ、漢字も同様、「易自伏羲卦，亦文亦畫，本合圖畫文字為一」[49]とされており、「黄帝之史蒼頡, 見鳥獸迒之迹, 知分理之可相別異也。初造書契。蓋取諸夬」[50]「引易彖辭而釋之」[51]と記されているからである。つまり蒼頡は、「黄帝の史官（記録官）であった蒼頡は、鳥や獣の足跡を観察して、類を異にするものは各々形も異なっていることを知り、文字を初めて作り[52]、『易経』の諸夬卦の方法を以って解釈するのである。また、漢字と『易経』との関係について、段石羽の『漢字の中に中国古代哲学思想』において、「漢字の体系の総体的な意象（イメージ）は、中国文化の総体的な意象の縮図である。漢字の体系の総体的な意象は、中国文化の総体的な意象である。…もし漢字をよく解説しようとすれば、中国古代文化、つまり中国古代哲学思想から着手しなければならない。中国古代哲学の焦点の一つは《易経》である」[53]という。さらに、彼は「陰陽五行と《易経》八卦が分からなければ、漢字の解説はうまくできないはず」[54]と指摘する。

このように漢字と『易経』との関係について多く言説によって解かれてきたが、ここで、ひとまず、『易経』の「易」という漢字それ自体の構成から、そのイメージ的な思考や直感的な思考から例を挙げて考えてみる。

今井宇三郎の訳によると、『易経』の「易」とは、「〈日月を易となし、陰陽に象る〉とする字義による説を是とする」[55]という。つまり、易という漢字は、陽と陰の対立している両相である太陽と月の陰陽両相が交替によって万物が生まれ、永遠に循環交替で生々流転している現象から、日と月を上下に組み合わせて一体化し、統合された漢字である。この発想は、まさに「対立物の調和的統一する」太陽と太陰を全体的に見て直感で考える思考様式であると考えられる。今井宇三郎の訳において、「更に簡明には、易は変異である。その体は不易、その相は易簡」[56]であるといい、易の思想について「変異」（変化）と「不易」（不変）と解釈する。たかしかに『易経』は中国の重要な経典の一つ、「経典の中でも最も深遠な哲学を持つものとされてきた。…長いあいだにわたって中国人の人々の共感をよんできた」[57]とされており、思考様式に深く影響を与えているといえる。

中国の文字の起源に関しては、孔子は「上古には文字がない。…伏羲が河図洛書を観察し、後に卦象を描いた。これが文字の始まり」[58]であると、伏羲の八卦図から由来していると説明している。また白川静は「八卦のようなものを文字の起源とするのは、中国独自の思考である」[59]という。八卦図が誰によって創られてきたかは断定できないが、しかし占いとして、『易経』の陰陽八卦は、現在も使用されており、肝心なのは、陰陽八卦を考えた「聖人」た

ちはどんな発想の思考様式のもとで漢字を営み、その発想は漢字の習得者や使用者の意識といかなる関係してきたのかを検討することが重要であろう。

例えば、『易経』の最も中心たるものは、陰陽図（図 9）であるが、この白と黒の魚の形で表示される図は、白は陽、黒は陰を表わし、陽には陰、陰には陽を含んでいる。それが決して固定されている符号ではなく、太陽と月、昼と夜、天と地、火と水、生と死（乾と坤、男と女、白と黒、上と下）などのように、陽極まれば陰、陰極まれば陽と、反対側に変転する意味を表し、陰と陽が交わり、その組み合わせによって一つの要素（太極）を生成する形である。そこには「発想―符号（漢字）―連想」という漢字の構造によって象られた思考様式が有し、漢字の習得者や使用者によって意識的か、あるいは無意識的に働きかけ、互いに連動して思考様式として働くのである。

さらに、『易経』の八卦は陰爻（--）と陽爻(―)とを三つずつに組み合わせ、八つの方位を占う八種の卦を示している。この陰爻（--）は二本の横棒線で示し、陽爻(―)は一本の横棒線で示す。「その組み合わせによる六十四卦・三百八十四爻の相互的関連によって、万象の変化をきわめうるとする、一種の象徴主義的な世界観である」[60]。したがって、漢字も一本か二本の横棒、縦棒など多様な変化と筆画でつくられ、しかも四角い形を取り、それが漢字の形になる。そこには「変化」が重要な意味をなす。また、図 7 でみるように、太極が陰と陽の両極、さらに四象、八卦と派生される天と地の空間、そして八卦が図 8 で示されているように、八卦を構成する要素は「〈―〉（剛・陽）と〈--〉（柔・陰）との両爻である。「爻」とは、「まじわる」（交）の義で、両爻は相反するものであるが故によく相応じて相交わるのである。この両爻を交互に下上に重ねる方式によると、両爻ならば 2^2 で四種、三爻ならば、2^3 で八種（八卦）を得る」[61]。つまり、「爻」とは、「交わる」を意味し、それがいわゆる「交替」である。そして、図 8 によって示されたように、八卦は、自然、属性、家族、身体、方位を含む天、地、人の万象の構成関係と空間関係を示していることが分かる。図 9 で示している先天八卦図も、まさに鄭志朗の「外形構成と空間関係に注意する」実験の結果とは合致していると言えよう。また、陰と陽との「まじわる」ことにより八卦、さらに重ねると六十四卦と派生し、陰と陽両儀を結合させて互いに補い、一体化として統合され、究極の太極となる。それがあたかも字体と字体をまじわらせることによって形、音、義三役を一体化して統合するようになり、それが漢字となり、その造字法も同様な規則で機能していると言える。つまり、そこには「統合」という概念が中心的な役割を果たす。それが「万象を一語一字の整然たる形態に収めて表現する」[62]ということであり、または「完全な文字である」ということであろう。

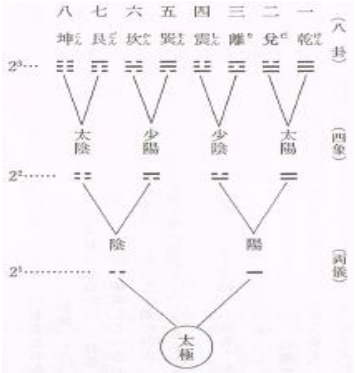

図 7 太極の陰陽両義四象八卦図

八坤	七艮	六坎	五巽	四震	三離	二兌	一乾	(八卦)
地	山	水	風	雷	火	沢	天	(自然)
順	止	陥	入	動	麗	説	健	(属性)
母	少男	中男	長女	長男	中女	少女	父	(家族)
腹	手	耳	股	足	目	口	首	(身体)
西南	東北	北	東南	東	南	西	西北	(方位)

図 8 八卦の代表的な象

図 9　先天八卦図

出典：図 7 今井宇三郎等『新訳漢文大系　第 63 巻　易経上』p.14　明治書院　2008 年

図 8 同上、p.16 より

図 9 吳秋文『生活易経』p.17　九州出版社　2005 年

段石羽の研究によると、「易学の思想は、陰陽、五行、中和等々の思想観念である。…これらの思想観念は、体系的に、規則的かつ大量に漢字に表示されている」[63]という。その根本的な発想は、易学の符号によって表された「陰性意象」、「陽性意象」、「五行意象」、「天干地支意象」などのように分類され、それがまさしくまた漢字の形で表れているという。ここで漢字の構成方法において易学の陰陽の思考様式と関連していることが分かる。

また、「五百四十」[64]の部を分けて構成されている『説文解字』において、合計「九千三百五十三字」[65]を収録している。許慎が説いた造字法の「六書」については、阿辻哲次の研究によると、「哲学の基盤に立って作られたものであろう…おそらく『易』にある「六」の数を意識して、故意に六種になるように仕立てられたものであろう」[66]と指摘する。さらに阿部は「『説文解字』の建部は、「一」の部から始まっており、その「一」は万物の根源、太始であると規定され、その部には元、天、丕、吏の諸字を収めている。…しかし、「一」に続いて「上」の古文である「二」部が設けられるのならば、数字の「二」は何故そこにないのだろうか。…「二」部はなんと十三篇下、すなわち全書の末尾の方に置かれているのである。…ここに『説文解字』五百四十の建部に関する理念が潜んでいるのだ。…徐慎はまず『易』の三才＝天・地・人の哲学を文字によって表現しようとした。」[67]といい、『易書』との関連について、「『説文解字』には 6 × 9 × 10 の計算から得られた五百四十の数からなる部を建てて、その部によって文字を収めている。その部の配列にも「天・地・人」、三才の思想が生まれている…許慎の手法はほかでもなく、真理と意識されていた『易』の思想体系にのとって、森羅万象を文字の次元で構築しようという行為なのである」[68]と解釈している。したがって、許慎は明らかに『易』の「思想体系」である五百四十をもって部たてをし、そこには、漢字の造字法も易学の思考様式の影響かにあることが考えられよう。つまり、易学の「変化」、「交替」、「統合」という易学の思考様式が働きかけ、漢字の組み立てる仕方を成しているとも言えよう。

4-2. 漢字の習得者や使用者の思考様式との関係

現在、中国と日本ではほぼ同様に、9年間の義務教育を実施している。学習者は漢字の習得過程において、漢字に含まれている思考様式に影響されるのは不可欠であろう。学習者は、しばしば、まず漢字の形をみることから認知し、それがいわゆる「取象」である。その「取象」という漢字を観察した上で、その次に漢字の構成要素を分解して、その義を理解していく。このように形、音、義を統合して習得していくので、鄭志朗の実験結果で示された通り、「小さい時から、それぞれの漢字の外形の構成と空間的関係に注意をするように勉強していくわけである」。つまり、漢字の構成に「総体的」に留意する「発想—漢字」、「漢字—連想」という習慣が養成される傾向がある。

その次は、語彙や熟語「表意」から習得する法則のことである。例えば:『漢字教学辞典』にある「臭（chòu)」字に関する解説は、筆者の幼いとき、この字を学ぶとき、親と先生から聞かされた説明と同じである。「臭」は「自」「大」「(一）点」から構成され、この順番で読むと「自大一点臭」（自ら尊大ぶると、たとえ本の少しであっても、臭くなる）という意味になる。また、「偏」の構成も「 ⺈ 」と「扁」を分解して、「把人看扁就有偏见」（人を低く見たら偏見が生まれる）ということであり、品性を修練することになる。いつも自ら尊大ぶる態度を取ったり、人を低く見下したりしないように気を付けている。その影響は、筆者にとっては実に大きかった。例えば「路」という字も先生から教わった時、先生は「 ⻊ 」と「各」に分けて、「足下各自有路」（訳：足元に各自の道がある）と解説して、皆さんはどのように人生の道を歩むのか本人にあると教えられたことは、今も鮮明に覚えている。また、小学生にとっては画数の多い漢字がなかなか覚えられないが、そういう漢字は、字の構成をまず分解して解釈するのは普通の教え方である。例えば、「贏」（勝つという意味）を教える場合、まず構成している「亡」、「口」、「月」、「貝」、「凡」と分解して説明することが多い。筆者の小学生のとき、中学校で先生をしている親戚からは、勝つためにまず、身命を惜しまず死亡する可能性の危機感を自覚しなければならない。そして勝つためには口を開いて周囲の人と良く交流し、また禍も口からなので、慎重にしなければならない。そして「月」という歳月や貝（財産）をかけて、非凡な努力し続けると、初めて「贏」になるかもしれないと教えられていた。今もその思考様式に左右されている。 このように品格の修練や人生の哲理を内包している漢字を学ぶと同時に、思考様式も学んでいる。このような漢字は枚挙にいとまがない。

また、意義が関連のある文字を八卦、六十四卦・三百八十四爻のように組み合わせによって意味を表せ、造語しやすい便利さを生かして、習得者はいつも連想して新しいものを表現しようと考えている。教育現場において、今も「組詞造句」、すなわち、一漢字を習う時、関連性のある漢字やすでに習得した漢字と組み合わせて新しい語彙、さらにその語彙を使って短文を作らせるという練習を欠かさない。その上に熟語、ことわざ、並びに古典文学の学習を通して、「漢文化」の薫陶を受けながら、連想の楽しさを吟味してもらい。例えば、「日」と「月」→日月、日光、月と亮→月亮、月光…。山→大山、上山、下山…。水→山水、

雨水、河水などのように連想・変化しながら認知して、語彙を増やす。また、漢字の並べを変換して、「月亮圆」、「河水弯」,「山高水远」「明月照山川」というように、漢字を学ぶと同時に、韻律や言葉の表現により、1 つの絵図が形成されて覚えて語彙を増えてもらい。例えば：盛唐詩人王之渙の「登鸛雀楼」の漢詩は、2、3 歳の子供に詠ませる親が少なくない。特に「欲窮千里目、更上一層楼」（千里の目を窮めんと欲し、更に上る一層の楼）3、4 句は、古今に伝わる向上精神と遠望胸襟を詠う名句であり、高いところに立ってこそ、千里先まで見えるという哲理を悟ることが期されている。

子供に対する家庭教育や学校教育において漢字を学ばせるとき、まず絵画から「取象」を通して、その漢字の構成や意義を理解し、書き方を覚えてもらうという認知過程で教えるパータンが少なくない。中国の語文出版社教材研究中心と十二省小語教材編写委員会に編集された『語文一年級上冊』教科書を見ればわかる。教科書は第 1 課が「観察人体識漢字」、第 2 課が「看図識字真有趣」というように構成されている（図 10 に参照）。第一歩は「観察」で、第二歩は「図を見て楽しもう」漢字と漢字の意味を考えさせ、発音を覚えてもらうという認知過程である。漢字の認知方式について、龚嘉鎮は、漢字の「形音義三要素は三角関係であり、その認知方式としては、字形を通して同時に音義の二つのルートからその字を認識して覚える」[69]と、説明しているが、筆者は漢字の認識過程において、その「形音義の三角関係」を土台にして、その構成を分解して思考、認識するプロセスも重要であり、その上に形、音、義を一体化に統合してから、初めてその漢字を認識して覚えられるのではないかと思う。漢字の認識過程は図 11 で示す。『漢字教学辞典』には、漢字に関する情報が多く、図 12 で示された「臭」字の説明は、まず字の由来構成から分解して解説し、そして義と音、書き方を提示している。

図 10 義務教育課程標準実験教科書『語文一年級上冊』第 1 課、第 2 課、第 13 課
出典：語文出版社教材研究中心十二省小語教材編集委員会『語文』　語文出版社　2005 年
第 1 課「観察人体識漢字」、第 2 課「看図識字真有趣」、第 13 課「静夜思」

広瀬等の研究は、「心理学の研究の結果は、必ずしも漢字が学習困難で使いにくいというわけではなく、むしろ、人間は積極的な漢字の特徴を生かした処理をし、漢字を利用していることを示唆していると考えられる」[70]という。したがって、漢字の構成と仕組みは、漢字

を習得する者の認識過程を決定し、その構成の仕方が逆に習得する者の思考を影響する。繰り返しになるが、漢字を学習するプロセスにおいて、学習者は、まず漢字の構成を体系的に「観察」すると同時に、結合された字体をまた「分解」、「思考」して、新たな形として構成するという発想が自然に身につけ、また「義、音」を交互に認知しながら、最後にまた「形、音、義」を一体化するように統合して認知して、その過程を経て、初めて漢字を習得できるようになる。つまり、「観察―分解、思考―統合」といった認識のプロセスは、まさに「六書」による漢字の構成の仕方や組成となっており、その発想は、易学の「変化」、「交替」、「統合」の思考様式に繋がり、物事の「変化」を「観察」しながら、そこでさらに新しい「統合」的な思考へと進んでいくのである。つまり、漢字の認識過程は、易学の「変化」、「交替」、「統合」の思考様式と、発想の上で交互に連動する関係にあり、漢字の習得者も、その認識過程において自然に漢字の源の「発想―漢字」、「漢字―思考―連想」の様式に従って物事を考えるようになり、その過程において、「変化」、「交替」、「統合」の思考様式が定着してきたと言えよう。

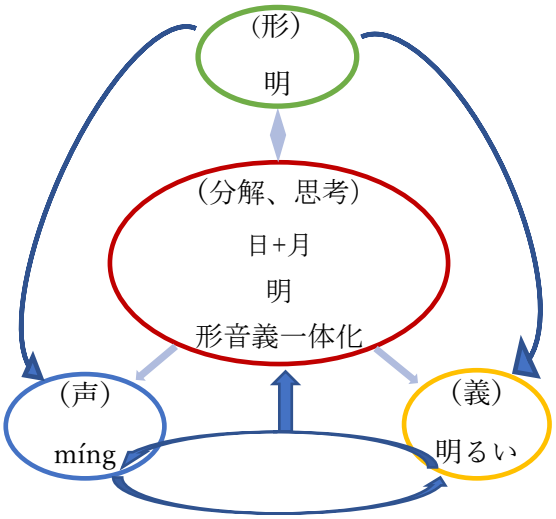

図 11 漢字の認識過程図

出典：『漢字漢語漢文化論集』p.11 に基づいて筆者が作成

臭 chòu　xiù

（甲骨文）

〔形义〕"臭"是个会意字。它的甲骨文写法十分生动。上部是一只突出的大鼻子（自），下部是一只头朝上、腿朝右、尾向下耷拉着的犬。看来上古人已经发现狗的鼻子特别灵，于是用犬和鼻子来会嗅味之义。楷变后上部的鼻子虽已看不出来了，但下部则干脆拿犬字来表示了。"臭"的本义是"嗅"，是动词，相当于闻味。《说文解字》："禽走臭而知其迹者，犬也。"意思就是：狗用鼻子一闻就知道从这里走过的是什么动物。闻就需有气味，因此"臭"也可当名词气味讲，比如"无色无臭"。在现代汉语中"臭"的主要意思变为气味难闻，与"香"相对。还可表示惹人厌恶的（如"臭架子"）及狠狠地（如"臭骂一顿"）。在口语中还表示某事没办好，如"臭球"、"臭棋"。为了便于区别，后来造了个"嗅"字来表示"臭"的本义闻味，读 xiù。

〔正字〕"臭"是多音字。当它作名词气味和动词闻味用时，读作 xiù。当它作形容词表示"香臭"的"臭"时，读作 chòu。"臭"共10笔。上下结构。注意下边是"犬"，不要写成"大"。

〔教学〕识记这个字有一句常用的口诀：自大一点会变臭。这个口诀虽脱离了"臭"形体的原义，但清楚、明白，字面意思也讲得过去，所以不妨试用。

図 12『漢字教学辞典』における「臭」に関する解説

出典：劉和平主編『漢字教学辞典』p.26 山西教育出版社　1992 年より

５．むすび

漢字造字法は、象形、指事、会意、形成、転注、仮借などの手法を用いて既存の字と字、字と音を結合することにより、多様な新しい漢字を作り出してきた。現在も先人に作られた造字法は変わらなく、その単音節、形、音、義を一体に統合する原則を維持しながら、一字一字との結合が簡易にできる特徴を生かせて時代の変化や需要に応じて漢字を創たり、造語したりしてきた。また、その「初造書契。蓋取諸夬」の造字法の発想は、易学の「変化」、「交替」、「統合」の思考様式に由来しているが、造字法の規則が不変であるのと「易学」の「その体は不易、その相は易簡」とは照合的である。漢字は、このように易学文化と互いに働きかけて、まず「変化」の思考様式に基づき、書体を簡易にしながら、一字一音の特性を活かして書画、詩歌など多彩なスタイルに展開され、芸術的な鑑賞価値を生み出すようになってきたという関係が明らかである。「すべてのことばを文字として表記することに成功した」ことが確認でき、時代の変化に耐えられて発展してきたことも言えよう。

本稿では、主に漢字の造字法を検討したうえ、その発想と易学の思考様式との関連性への考察を通して、漢字の成り立ちと構造や仕組みは、いかにそれを言語として習得者や使用者の思考様式と働きかけて関係しているかを考察した。そこでは、漢字を形成する手法は、『易経』の思考様式と関連があり、漢字の構成や認識過程と習得者や使用者の思考様式との関係については、易学の思考様式に発想が合致しており、互いに働きかけていることが認められた。その発想による「六書」とまとめられた漢字の構成法は、長いあいだ漢字の習得者や使用者の思考様式も、その認識過程を通して、易学の「変化」、「交替」、「統合」といったような思考様式において「発想―漢字」、「漢字―連想」を内包し、交互に働きかけをしていることが確認できた。かくして漢字の使用者は、自ら自然に易学の思考様式と連動して働き、物事の「変化」に対して互いに動態的に応答し、「発想―漢字―連想」というような思考様式を有するようになったのではないかと考えられる。しかし一方で、文字の使用が複雑な現実に直面する場合、たしかに漢字の豊富さと共に表示・言明において自由無碍であるが、その反面、思想や論理・概念構築においてしばしば困難が生じ、法則・掟においては、負の側面があることも紛れもない事実である。負の側面に関しては今後の研究課題とする。

---

[1] 白川静『漢字の世界 1―中国文化の原点』p.11　平凡社　2003 年
[2] 白川静『漢字逍遥』p.221　平凡社　2014 年
[3] 冨谷至『漢字の中国文化』p.1　昭和堂　2009 年
[4] 同上 p.155
[5] 許慎『説文解字』「十五上」p.314　中華書局出版　1979 年
[6] 同上
[7] 『白川静著作集別巻　説文新義 8』p.3　平凡社　2009 年
[8] 同上
[9] 河南省文物考古研究所編『舞陽賈湖』p.518　科学出版社　1999 年。
[10] 胡裕樹『現代漢語』p.151　上海教育出版社　1979 年
[11] 白川静『漢字の世界 1 』p.14　平凡社　2007 年

[12] 馮凭 吳長旗「舞阳龟甲刻符初探」『中原文物』2009 年第 3 期 p.51
[13] 白川静『漢字の世界 1—中国文化の原点』p.13　平凡社　2003 年
[14] 同上 p.14
[15] 『白川静著作集別巻　説文新義 8』p.1　平凡社　2009 年
[16] 許慎『説文解字』「十五上」p.314　中華書局出版　1979 年
[17] 阿辻哲次『漢字学—『説文解字』の世界』p.106　東海大学出版社　2013 年
[18] 曹先擢「汉字的表意性和汉字简化」中国社会科学院编 『汉字问题学术讨论会论文集』p.27　语文出版社 1988 年
[19] 許慎『説文解字』「十五上」p.198　中華書局出版　1979 年
[20] 早川咲「「六書」について」p.35
https://www.kanken.or.jp/project/data/investigation_incentive_award_2011_hayakawa.pdf
（2022 年 1 月 27 日閲覧）
[21] 同上 P.36
[22] 白川静『漢字の世界 1—中国文化の原点』p.30 平凡社　2003 年
[23] 今井宇三郎等『新訳漢文大系　第 63 巻　易経下』p.1596　明治書院　2008 年
[24] 今村与志雄訳『魯迅全集 8』p.104　学習研究社　1984 年
[25] 白川静『漢字の世界 1—中国文化の原点』p.12　平凡社　2003 年
[26] 同上
[27] 今井宇三郎等『新訳漢文大系　第 63 巻　易経下』p.1579　明治書院　2008 年
[28] 龚嘉鎮『漢字漢語漢文化論集』p.8　巴蜀書社　2002 年
[29] 出典：左民安『细说汉字—1000 个汉字的起源与演变』p.322　九州出版社　2005 年
[30] 同上 p.239
[31] 龚嘉鎮『漢字漢語漢文化論集』p.6　巴蜀書社　2002 年
[32] 同上 p.9
[33] 狩俣繁久「人間の言語の特性と起源 ――語文から二語文へ――」琉球大学学術リポジトリ 2019 年 3 月 15 日 p.205
[34] 鄭也夫『文明是副産品』p.150 中信出版社　2015 年
[35] 白川静『漢字の世界 1—中国文化の原点』p.14　平凡社　2003 年
[36] 龚嘉鎮『漢字漢語漢文化論集』p.16　巴蜀書社　2002 年
[37] 曹先擢「汉字的表意性和汉字简化」中国社会科学院编 『汉字问题学术讨论会论文集』p.19　语文出版社　1988 年
[38] 『白川静著作集 1　漢字 I 』p.14　平凡社　2007 年
[39] 白川静『漢字の世界 1—中国文化の原点』p.18　平凡社　2003 年
[40] 龚嘉鎮『漢字漢語漢文化論集』p.9　巴蜀書社　2002 年
[41] 曹念明『漢字哲学』pp.28～29　巴蜀書社　2006 年
[42] 白川静『漢字の世界 1—中国文化の原点』p.27　平凡社　2003 年
[43] 龚嘉鎮『漢字漢語漢文化論集』p.10　巴蜀書社　2002 年
[44] 同上
[45] 曾志朗「論文字組合在閲讀歴程及認知能力間的関係:兼論中文閲讀研究在當代認知科学上的地位」高尚仁・鄭昭明合編『中国語文的心理学研究』pp.95～96　文鶴出版公司　1982 年
[46] 同上 p.99
[47] 金谷治『易の話『易経』と中国人の思考』pp.14～15　講談社学術文庫　2010 年
[48] 今井宇三郎等『新訳漢文大系　23　易経上』p.2　明治書院　2008 年
[49] 『易経証釈』「例言」電子版
https://cread.jd.com/read/startRead.action?bookId=30049424&readType=1（2021 年 11 月 20 日に閲覧）
[50] 許慎『説文解字』「十五上」p.314　中華書局出版　1979 年
[51] 許慎著段玉裁注『説文解字注』p.754　上海古籍出版社　1981 年
[52] 阿辻哲次『漢字学—『説文解字』の世界』p.23　東海大学出版社　2013 年
[53] 段石羽著『汉字中的中国古代哲学思想』p.2　新疆人民出版社　2006 年
[54] 同上 p.1
[55] 今井宇三郎等『新訳漢文大系　第 63 巻　易経上』p.47　明治書院　2008 年
[56] 同上 p.54
[57] 金谷治『易の話『易経』と中国人の思考』p.14　講談社学術文庫　2010 年
[58] 『易経証釈』「全易大旨及習易用例　宣聖講義－孔子」電子版
https://cread.jd.com/read/startRead.action?bookId=30049424&readType=1（2021 年 11 月 20 日閲覧）
[59] 白川静『漢字の世界 1—中国文化の原点』p.31　平凡社　2003 年
[60] 同上

[61] 今井宇三郎等『新訳漢文大系　第 63 巻　易経上』p.13　明治書院　2008 年
[62] 白川静『漢字の世界 1—中国文化の原点』pp.31～35　平凡社　2003 年
[63] 段石羽著『汉字中的中国古代哲学思想』の「漢字文化的闡釈」p.2　新疆人民出版社　2006 年
[64] 許慎『説文解字』p.318　中華書局出版　1979 年
[65] 同上 p.1
[66] 阿辻哲次『漢字学—『説文解字』の世界』p.131　東海大学出版社　2013 年
[67] 同上 pp.161～163
[68] 同上 p.165
[69] 龚嘉镇『漢字漢語漢文化論集』p.11　巴蜀書社　2002 年
[70] 広瀬等「漢字の認知に関する心理学的研究の展望」p.57　『広島大学教育学部紀要第 1 部』　第 40 号 1991 年